

第 67 回 諜報研究会

アメリカによる対北朝鮮心理戦の諸相：1960 年代後半～70 年代初頭

2025 年 6 月 14 日

小林 聡明

はじめに

○問題意識

心理戦のアリーナとしての朝鮮半島 ⇒ 現在も続く心理戦

歴史的起源としての朝鮮戦争 ⇒ 豊富な研究蓄積（韓国、日本）

※朝鮮戦争後、どのように心理戦が行われていたのか／行われているのか

⇒史料的な限界と現在進行形の問題としての難しさ

○報告目的

アメリカは、北朝鮮に対する心理戦を、どのように行っていたのか

1960 年代半ば～1970 年代初頭 ⇒ 現在、朝鮮半島で行われている心理戦の実態を、歴史的な観点から見通すための手がかり

○報告課題

「真理作戦」 (Operation Jilli) の分析

第 7 心理戦部隊 (7th PSYOP) による作戦計画書 (1970-71) の検討

○分析史料

米国立公文書館で機密解除された軍事文書

2014 年 3 月：報告者による情報公開申請

2016 年 5 月：開示決定、公開

2014 年 3 月：報告者による情報公開申請

2018 年 9 月：開示決定、公開

○時代背景：

1963 年 12 月：朴正熙政権発足

1964 年：韓国、ベトナム出兵

1968 年 1 月 21 日：北朝鮮ゲリラ、青瓦台襲撃

1968 年 1 月 23 日：米情報収集艦プエブロ号、北朝鮮に拿捕（プエブロ号事件）

1968 年 2 月：米偵察機 EC-121、日本海で北朝鮮により撃墜

⇒北朝鮮による挑発行動の活発化

1969 年 7 月 25 日：ニクソン・ドクトリン発表

⇒米、対韓コミットメント低下方針 韓、対米不信と対北脅威認識の増大

1. 「真理作戦」の実態

(1) 作戦の準備

①心理戦の実施部隊

・米太平洋陸軍放送・視覚活動部隊 (USABVAPAC)

1958年、朝鮮戦争後も継続した米軍心理戦部隊の再編により発足

司令部 (Fort Buckner 沖縄)、韓国分遣隊 (ソウル)、日本分遣隊 (North Camp Drake 埼玉・朝霞)

1963年9月：台湾分遣隊

1964年5月：第244心理戦分遣隊 (Bein Hoa 南ヴェトナム)

・7th PSYOP

1965年8月：7th PSYOP 発足

1965年10月：7th PSYOP が USABVAPAC の任務・機能を引き継ぐ

②作戦立案の背景

北朝鮮の心理戦能力に対する USABVAPAC の脅威認識

当初、韓国政府による気球を用いた対北心理戦を支援 (1963年頃)

厳しい報道統制、プロパガンダの虚偽性暴露の困難

⇒北朝鮮の人々に真実を伝えることの重要性

宣伝ビラの有用性に着目 ⇒識字率の高さ、ラジオなど他のメディアへの接触の困難さ

心理戦技術を改良する必要性の認識 ⇒ OJ を起草

③作戦立案の背景

『気球によるビラ撒布ハンドブック』 (1956)：米政府機関、大学研究機関に研究委託

科学的知見の提供：気球放出する際に必要な技術関連事項、計算方式、危機の点

検方法、手順、ビラの漂流パターンなど ⇒ 気象学者の協力必要性

(2) 作戦の実施

①ビラの撒布

1964年6月30日：作戦開始

烏山空軍基地、C-47 輸送機、38度線南方

1965年～：C-130 輸送機の運用開始、最大高度 25000ft、

撒布されたビラ 9800 万枚/年、北朝鮮の人口居住地域の 61% をカバー

※ジョンス・ホプキンス大学作戦研究室の研究成果 (1954) の活用

1966年～：作戦の拡大決定、18,300 枚、目標 10 億枚 (年間)、海や川の活用検討

7th PSYOP による気象観測

最適な時期：4月中旬～9月中旬

③ビラの制作

- ・他機関との協力：米軍、在韓米公報院、在韓米大使館、CIA ソウル支局、韓国政府（？）
- ・7th PSYOP 韓国分遣隊（第23心理戦分遣隊）、ビラの草案作成
- ・沖縄の7th PSYOP、韓国・原州にある韓国陸軍の印刷施設
- ・在日米陸軍副官印刷出版物センター（朝霞）

朝鮮半島、沖縄、ヴェトナムで行われる心理戦のための宣伝ビラや出版物の印刷

- ・デザインと費用、輸送機乗員に対するリスク

ビラの小型化：メリットとデメリット

④ビラの内容

- ・韓国と自由世界

最重要テーマ：韓国の経済発展、次の重視されたテーマ：韓国の社会発展

- ・脱北の誘導

1965年から撒布、しかし翌年から印刷枚数は減少

- ・反共

1965年に入ると急減、翌年から増加

金日成に言及したビラは避ける方向が明確

※北朝鮮批判<韓国の魅力（経済、社会、政治の発展）：1960年代後半、主たる方針

(3) 作戦の評価

①効果分析

- ・反応行動

脱北者への心理的影響

韓国の発展、説得的に示すことの成功

世代間の反応差異：高齢者による嘘の確信、若者のなかでの疑念の芽生え

- ・元北朝鮮住民からの報告

ビラへの好奇心、恐怖心

北朝鮮当局による撒布されたビラの対応

②北朝鮮の反応

- ・ビラの変化

先行する北朝鮮の気球作戦

指示的で説得的なテーマ、架空の「韓国反政府組織」によるビラ宣伝活動

北朝鮮ビラの変化

外形的な変化、情報提供目的、写真の多用、報道スタイル、韓国風の表現や語彙の使用⇒7th PSYOP、OJの「基本原則」と一致

・メディアの反応

『労働新聞』：OJへの対抗、親北朝鮮、プロパガンダ記事が4から5倍に増加
韓国の消費財入手状況の写真⇒同紙に新しい消費者向け製品の写真掲載
千里馬運動の「廃止」

OJによる攻撃、15種類のビラ作成

千里馬運動に対する北朝鮮の人々の憎悪

※7th PSYOP、精度を欠いた分析

○ OJの評価

- ・心理戦のビラのレイアウトや内容が改善した
- ・OJによってビラの拡散や漂流を制御する先進的な研究が主導される
- ・高高度でのビラ撒布に先駆的な進歩をもたらす

2. 7th PSYOP 作戦計画書の分析

(1) 対北朝鮮心理戦計画書（1970-71）

- ・7th PSYOP 作成
- ・心理戦遂行体制

実施部隊：7th PSYOP

Fort Buckner（沖縄）、ソウル、Bein Hoa (RVN)、North Camp Drake（埼玉・朝霞）

USAPPCJ、USIA Regional Service Center (RSC：マニラ)、FBIS（沖縄、韓国、RVN）

協力機関：米太平洋軍、米太平洋陸軍、米太平洋空軍、米太平洋艦隊、国連軍、USIS-Seoul（駐韓米公報院）、駐韓米大使館、_____、韓国政府

※国連軍心理戦プログラムとしての戦略的な対北心理戦の実施

- ・作戦対象：

北朝鮮の人々：特に朝鮮労働党員、軍人、技術者、知識人、労働者、農民

アメリカの国家的、軍事的目的を支える行動への変容を促し、そうした意見の風土を醸成 ⇒攻撃的な心理圧力、対象となる層や集団、構成員の弱みに付け込むプロパガンダ

(2) 目的

① 長期

- ・独裁政権からの権力移行の促進、朝鮮労働党によるマルクス・レーニン主義の解釈を緩和させることで、偶発的なリスクの減少

・対韓浸透への努力を国内問題の解決に向かわせるために、北朝鮮の人々のなかで意見の不一致を作り出すこと

② 短期

・共産主義者から韓国の安全と領土を守る防御者としての国連軍のイメージを促進し、北朝鮮とその指導者が、平和を維持し、攻撃に立ち向かう韓国と国連軍の意思と決意、能力に気がつかせること

・北朝鮮とその指導者に対する韓国の経済的発展と政治的安定の伝達

・北朝鮮の人々のかに共産主義体制やシステムへの不満を創出、促進し、増大させ、北朝鮮の軍人や一般の人々の士気を低下させ、離反を促すこと

・韓国の軍人と民間人が、ベトナムの人々に利益となる平和的な方法で、ベトナム共和国を支援していることを北朝鮮の人々に納得させること。

・北朝鮮の攻撃や停戦協定違反を暴露する積極的な情報プログラムをできるだけ広範な人々に実施すること。

(3)方法

・プロパガンダ・ラジオ：「国連軍総司令部放送」（VUNC）

韓国の出来事を伝えることが第一の目的：韓国と沖縄での番組制作

・宣伝ビラ撒布：Operation Focus Truth etc.

ビラ内容：北朝鮮の脆弱性、韓国の **Positive** な達成、情報の出所がわからないようにするために宣伝ビラから米軍や国連軍の痕跡を削除すること

日本（朝霞）で印刷後、韓国・烏山空軍基地に空輸

・Float Program：韓国による実施、プロパガンダの目的（出版物や石けんなど）をもった物品を流し、北朝鮮の沿岸部や内陸の川に届ける⇒ 7th PSYOP 支援

印刷物は Operation FT から一部流用、浮き輪 4 万個、石けん 15 万個を準備 ⇒ 米軍、国連軍の痕跡抹消：韓国海軍との協力で実施

・Balloon Program：

韓国による実施、風船にプロパガンダ目的の物品を結びつけて北朝鮮にむけて飛ばす：小型ラジオ etc.

・拡声器

非武装地帯（DMZ）で使用

※北朝鮮からのプロパガンダ圧力への対処としての対北心理戦活動

・心理戦メディアのなかでラジオがもっとも信頼度が高い

・宣伝ビラは対象者へのインパクトと接触容易さから利点がある。

※対北ラジオ、対南ラジオと比較し、脆弱

⇒KBS（韓国政府）、韓国軍による放送、米政府系（VOA、VUNC）極東放送（HLKX/FEBC）

おわりに

○経験と心理戦

・第二次世界大戦、朝鮮戦争での経験継承

○学知と心理戦

・Scientific な心理戦

○朝鮮半島と心理戦

・軍事、外交、コミュニケーション

【参考文献】報告者による論文および書籍

「1960年代後半におけるアメリカの対北朝鮮心理戦－「真理作戦」を中心に」『山本武利著作集』第7巻、文生書院、2025年7月

『文化冷戦と知の展開－アメリカの戦略・東アジアの論理』森口（土屋）由香、川島真、小林聡明編、京都大学学術出版会、2022年
韓国語、中国語（繁体字）、英語版有り

「M.L.オズボーンの捕虜教育経験と‘貫戦史’（Trans-War History）としての心理戦」『インテリジェンス』19号、早稲田大学20世紀メディア研究所、2019年3月
増補改訂した韓国語版は、共著書『新しく書く地域史と世界史-研究方法・教育モデルと事例』先人、2022年に所収

「アジア太平洋地域における戦時情報局（OWI）プロパガンダ・ラジオ－朝鮮語放送の実態解明に向けた基礎的分析」『政経研究』54巻、2号、日本大学法学会、2017年、

「冷戦期アジアにおけるVOAの展開と中継所の世界的配置」『占領する眼・占領する声－USIS映画とVOAラジオ放送』土屋由香、吉見俊哉編、東京大学出版会、2012年

「米軍文書にみる対北朝鮮心理戦の一断面－1970年前後を中心に－」『ジャーナリズム&メディア』13号、日本大学法学部新聞学研究所、2019年3月

「冷戦期アジアの米軍心理戦－東アジアから東南アジアへの展開と拠点としての沖縄」『インテリジェンス』17号、早稲田大学20世紀メディア研究所、2017年3月
増補改訂した韓国語版は、共著『熱戦のなかの冷戦、冷戦のなかの熱戦-冷戦アジアの思想心理戦』チジンジン、2018年に所収